

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：30107

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13206

研究課題名（和文）メディアの音声表現におけることばのジェンダーのイメージ

研究課題名（英文）Gender differences in impressions of speeches in media content

研究代表者

丸島 歩（MARUSHIMA, Ayumi）

北海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：20782676

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、メディア演技音声においては、ジェンダー表現を実現するための様々な音声的手段が用いられていることが明らかになった。

まず、同一声優の女性役と男性役の音声を比較すると、女性役は自然発話の女性より高く、男性役では自然発話の女性に近かった。ただし男性役ではささやき声が効果的に用いられていた。また、女性役では男性役より母音の第2・3フォルマントが高い傾向があった。さらに文末イントネーションでも、女性役は疑問文以外でも上昇調が多用され、男性役では役柄の人物像に応じた使い分けがなされていた。

以上のように、様々な音声的手段を巧みに操ることで、高度な演技によるジェンダー表現が体现されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、日本語のことばのジェンダーのイメージに関する研究は主に文字資料や文字化された資料を用いて行われており、どのような音声の特徴が女性的、あるいは男性的であるとされているかについてはあまり明らかにされてこなかった。本研究は、男性役と女性役を演じた同一の女性声優の音声を分析対象とすることで、どのように役柄の性差を体现しているかを明らかにした点で、社会言語学やジェンダー言語学の領域における学術的な意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Through this study, it became clear that various phonetic means are used in media acting voice to achieve gender expression.

A comparison of the voice of the same voice actress in female and male roles revealed that the voice was higher than that of spontaneous female speech in the female roles and closer to that of spontaneous female speech in the male roles. However, whispers were used more effectively in the male roles. The second and third formants of vowels tended to be higher in the female roles than in the male roles. In intonation at the end of sentences, intonation of rise were used more frequently in female roles, even in non-interrogative sentences, while in male roles, they were used according to the character of the role.

As described above, the skillful manipulation of various phonetic means embodied gender expression through advanced acting.

研究分野：音声学

キーワード：演技音声 社会言語学 ジェンダー 実験音声学

1. 研究開始当初の背景

ことばが持つジェンダーのステレオタイプについては、メディア作品における言語表現がことばのジェンダーのステレオタイプを強化しているという指摘が、社会言語学の分野からなされている。

しかしこれらの研究は、文字上での表現や音声を文字化したものを分析対象としていた。文字情報では表せないプロソディ(イントネーションやリズムなど)の情報は、音声言語の印象を決定づける重要な要素であるにもかかわらず、ほとんど扱われて来なかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アニメやラジオドラマ、外国映画の吹き替えのような、音声の表現が重要なメディアにおいて、音声表現している役柄の性別を決定づける要素を探ることで、それが日本語の音声言語の性別イメージやステレオタイプをどのように形成しているのかを明らかにすることである。

日本語における性別のステレオタイプを音声言語特徴の面から明らかにしようとした研究は、これまで研究代表者が知る限り存在しない。また、本研究はこれまでにあまり着目されて来なかった、音声言語を社会的な側面に照らして分析するという観点により、音声学と社会言語学を結びつけ得るものであり、両分野に資するところが大きいと考える。

3. 研究の方法

当初は声優の訓練を受けた複数名の女性の男性役と女性役の音声を、役柄以外ではできるだけ同条件で収録したものを比較することでジェンダー差を見出す予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響や、代表研究者の研究環境の変化により、音声を収録することができなかった。

そこで、市販されている音声ドラマに収録されている同一の女性声優のそれぞれ複数の男性役と女性役の音声を分析することとした。本研究で分析・比較した観点は、基本周波数、母音の音質、文末等のイントネーションである。

4. 研究成果

まず、基本周波数の分布を分析した(表1)。女性役の女性役音声の中央値は16.7ST(100)で、Hzに換算すると262.6Hzとなる。飯田(1940)、粕谷ほか(1968)や佐藤(1975)などの女性音声のピッチは200~260Hz程度で、本研究で分析した女性役の音声は女性音声としては比較的高いほうであると言える。一方で男性役の音声の中央値は12.8ST(100)で、209.3Hzで女性役音声に比べると低くなっているものの、実際の男性の音声(100~130Hz)と比較すると非常に高く、女性の通常の音声の比較的低いところに位置していると言えるだろう。

表1 役柄の性別と基本周波数情報

| | 女 | 男 |
|-------|------|------|
| 中央値 | 16.7 | 12.8 |
| 最高値 | 35.5 | 31.0 |
| 最低値 | -1.5 | -4.1 |
| 四分位範囲 | 7.9 | 8.5 |
| レンジ | 37.0 | 35.1 |

(ST (100))

しかし、男性役音声では発話末のピッチが自然減衰するところでささやき声が頻繁に用いられていることが観察された。これによって実際には生理的制約で発話できないほど低い音声を、聴覚印象上では再現していると考えられる。

次に、音質を比較するために、定量的な分析がしやすく、聴覚印象にも大きな影響を与えらると思われる母音フォルマントを比較した(図1)。服部ほか(1957)では成人男女の母音音声の第1~3フォルマントを分析しており、すべての母音のフォルマントについて女性の方が男性よりも25%程度高くなっている。一方で本研究の音声では第2・第3フォルマントではおおむね女性の方が男性役よりもフォルマントが高くなっているものの、第1フォルマントではあまり差が

見られず、/a/に関しては男性役のほうが有意に高くなっていた。また、第2・第3フォルマントの差については、第2フォルマントについては比較的后舌寄りの母音で差が大きく、前舌母音である/i/では有意な差が見られなかった。一方で第3フォルマントは/u/で有意差が見られず、/o/で有意傾向となっていたほかは有意に女性役が高くなっており、第2フォルマントを補完する形で役柄の男女差が反映されていたと言える。特徴的だったのは女性役で第2フォルマントが全体的にかなり高くなっており、これは女性役をより女性的に演じる戦略である可能性がある。

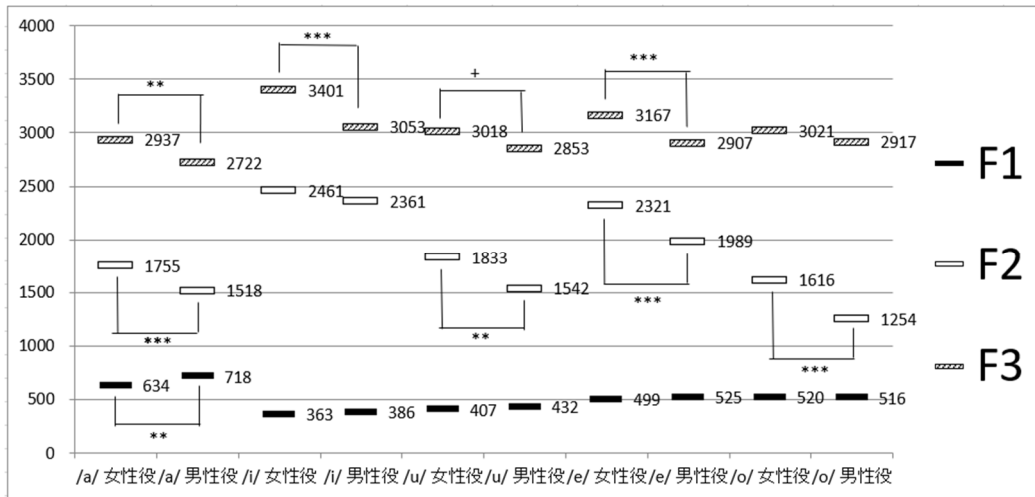


図1 各母音のフォルマント平均値

文末等のイントネーションについては、郡(2003・2004)を参考に分類を行った。内田(2009)によれば、抑揚の大きさを変化させると話者の性格印象が大きく影響を受けることから、分析音声の役柄の性格印象について、23名の大学生を対象にした聴取実験を行った。役柄の性格印象とイントネーションの特徴をまとめたのが以下の表2である。女性役では役柄の性格印象を問わず、相手の回答や反応を引き出すような音調である「疑問型上昇調」が多用されているが、男性役では性格が異なれば異なる特徴があらわれた。一方で外向性が高く勤勉性が高い役柄について、男女ともに文末以外の位置に聞き手の注目を引き付け訴えかける意図のある「上昇下降調」が多く用いられていた。

表2: 役柄の性別・性格印象とイントネーションの特徴

| 性格印象 | 男性役 | 女性役 |
|---------------|----------------------------------|--|
| 外向性が高く、勤勉性が高い | ・「強調型上昇調」を多用 ・文末以外で「上昇下降調」を多用 | ・「疑問型上昇調」を多用(女性文末詞が多い) ・文末以外で「上昇下降調」を多用 |
| 外向性が高く、勤勉性が高い | | ・「疑問型上昇調」を多用(疑問が多い) |
| 外向性が低く、勤勉性が高い | ・「平調」を多用 | |

以上のことから、今回分析した女性声優の音声から、それぞれの性別の役柄を演じるために多様な手段を用いていることが観察できた。その特徴はそれぞれの性別の音声を必ずしも忠実に再現しているとは限らず、よりそれらしく演じるための工夫がなされていた。特に女性役の音声では声優と性別が一致しているにもかかわらず、自然音声よりも基本周波数や母音の第2フォルマントがかなり高く表現されており、声の高さや第2フォルマントの高さは音象徴の分野でも「小ささ」「かわいらしさ」と結びつくことが指摘されており、女性役を演じる際には実際の女性の音声よりそれらが強調されているとも言える。金水(2003)では役割語としての女性語が

フィクションの世界で再生産され、知識として強化されていると述べているが、音声的特徴の面にも同じことがあてはまる可能性がある。

また、男性役においては様々な音声的手段を巧みに操ることで、生理的制約を超えた高度な演技によるジェンダー表現が体現されていることが観察できた。

<参考文献>

飯田武雄 (1940) 「日本人の声域に関する研究」『福岡医学雑誌』33-3, pp.229-292.

粕谷英樹・鈴木久喜・城戸健一 (1968) 「年齢, 性別による日本語5母音のピッチ周波数とホルマント周波数の変化」『日本音響学会誌』24-6, pp.355-364.

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店.

郡史郎 (2003) 「イントネーション」北原保男 (監修)、上野善道 (編) 『音声・音韻』(朝倉日本語講座3) 109-131. 朝倉書店.

郡史郎 (2014) 「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41, 85-107.

佐藤大和 (1975) 「男女声の声質情報を決める要素」『研究実用化報告』24-5, pp.977-993.

服部四郎・山本謙吾・小橋豊・藤村靖 (1957) 「日本語の母音」『小林理学研究所報告』1, 69-79.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 丸島歩 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 女性声優の演技音声にあらわれる役柄のジェンダー差 文末イントネーションに着目して | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 実験音声学・言語学研究 | 6. 最初と最後の頁 16-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 丸島歩 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 女性声優の演技音声にあらわれるジェンダーの表現 母音フォルマントに着目して | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 新人文学 | 6. 最初と最後の頁 165-139 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 丸島歩 | 4. 巻 115 |
| 2. 論文標題 女性声優による役柄の性別の異なる音声の音響的特徴 基本周波数に着目して | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 大阪経済法科大学論集 | 6. 最初と最後の頁 23-33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 丸島歩 |
| 2. 発表標題 演技音声の表現にあらわれるジェンダー差のイメージ |
| 3. 学会等名 人文学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 丸島歩 |
| 2. 発表標題 女性声優が演じる演技音声における役柄の性差 文末イントネーションに着目して |
| 3. 学会等名 日本実験言語学会第13回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 丸島歩 |
| 2. 発表標題 女性声優の演技音声に見る役柄の性別の表現 実験音声学的手法を用いて |
| 3. 学会等名 日本語ジェンダー学会 第1回研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 丸島歩 |
| 2. 発表標題 女性声優が女性および男性役を演じた音声の母音の音響的特徴 |
| 3. 学会等名 日本音声学会第33回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|